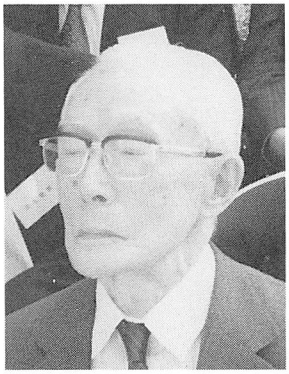
# 山中太木先生を偲ぶ

日本医史学会常任理事　杉　立　義　一

本会名誉会員であり関西支部長であられた山中太木先生は、十月十二日何のお苦しみもなく眠るが如く八十八歳の生涯をおえられた。先生はその一ヶ月前にも京都医学史研究会例会で「内毒素・シュワルツマン現象」について、一時間余にわたり蘊蓄を傾けた講演をなさったのに、忽然としてご他界なされたことは、うたた人生の無情を感じずにはおれない。

ここに先生のご略歴をしるして追悼の辞と致します。

昭和八年大阪高等医学専門学校（現大阪医大）御卒業、直ちに同校細菌学教室に入る。昭和十四年助教授、同十五年から二十一年まで陸軍技師、同二十一年復員して教室に帰り、同二十五年大阪医大教授となり微生物学教室を主宰し、数多くの研究業績をあげられた。なかでも「シュワルツマン現象」と「野兎病」に関する二大研究は国際的に高い評価をうけている。



故山中太木先生

昭和四十九年四月、第四十七回日本細菌学会長として西本願寺本堂に於て、先師先哲の慰霊感謝顕彰会を催し、ひきつづき記念医学史講演会（緒方富雄氏―幕末の疫病と緒方洪庵。藤野恒三郎氏―明治時代の細菌学教科書について。中島健蔵

氏―野兎病研究初期）を開催して、その全文を『日本細菌学外史』として出版された。その巻末には跋文として、この会を開催するに到った先生のご趣旨が詳しく述べられている。またこれと相前後して『先師先哲遺影』（七六頁）を編集されたが、この中には古今東西の著名医学者の肖像、業績、格言等約六百点の写真が収録されている。

先生は学生時代より医学史に関心深く、級友鈴木元吉氏とともに癩病史を研究され、すでに戦前の杏林温古会にも出席されていた。殊に本間棗軒の『内科秘録』に記載されている「食兎中毒」の記録により野兎病の研究にすすまれ、大原八郎博士御夫妻とは研究を通じて親交を結ばれた。

昭和五十二年、撰ばれて大阪医大学長に就任された。

日本医史学会第九十二回総会（於京都市）では「一隅を照らす医学の輝き」と題する特別講演をしていただいた。

先生は常々、温古知新ではなくて温古致新でなければならないと説かれた。学長退任後は医道顕彰会副会長として医家先哲の顕彰につとめられた。先生は人と微生物が協調共存する宇宙観を持っておられた。さらに医学は宗教と共にあるべきことを説かれた。

このような先生の思想・遺訓は多くの門弟、後輩により継承されるものと信じる。

先生、どうか安らかにお眠り下さい。

御戒名

大鑑院学誉遠山仁木居士

（合掌）